

平成27年度 各地区研究大会運営における成果・課題・工夫等

【北海道地区】「北の大地から世界を見つめ 新しい社会の形成に向けて挑戦する子どもを育む 学校経営の推進」 平成27年9月11日（金）12日（土）開催

〔成果〕

- 21世紀を生きる子どもたちに求められる資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントの確立、今日的教育課題の解決に向けた指導体制の構築、教職員の資質向上と組織の活性化等における校長の役割と具体的方策についての協議が実施された。
- 分科会を「学校づくりのビジョンを語り合う場」「交流の成果を持ち帰ることのできる場」として位置付け、参画型の分科会運営を実行して3年目。アナライズカードや参会者持参資料・名札の効果的な活用、実物投影機を使用しての全体協議の工夫等による参会者一人一人の参画意識の高まりが見られた。

〔課題〕

- 分科会における研究発表とグループ協議の関連性を考慮し、協議内容を焦点化することで、時間配分を工夫する必要性。
- 分科会の協議を通して明らかになったことや課題点等を整理し、次の大会へ引き継ぎながら、継続して研究を深めていくこと。

〔運営上の工夫〕

- 分科会の充実のため、事前に3回の分科会運営者研修会を開催、発表内容や協議の柱等について検討、電子メールで分科会運営者・研究発表者が何度も要項原稿や当日の進行シナリオ等について点検・確認した。
- 分科会の小グループのメンバーを各研究課題に応じて学校規模・地域性等を考慮して編成、協議を円滑に進行。グループを途中でシャッフル、違う見方から協議を深める工夫を行った。
- 分科会の全体協議において、グループごとにキーワード（漢字で一文字など）を出し合い、それらをボードに並べて比較・吟味・検討する試みを行った。
- 北海道校長会ホームページに各分科会の研究課題、研究発表の概要、当日持参する資料などについて掲載、事前に必要な情報を提供、参会者の課題意識や参加意欲が高まった。

〔その他〕

- 参会者の当日の急な欠席によって、急遽グループのメンバー変更に対応し、当日の欠席連絡が、迅速・確実に分科会運営責任者又は事務局に伝わるような連絡体制の整備と事前の各地区への連絡方法の確認をしていくことが重要。

【東北地区】「ふるさとに誇りをもち 夢に向かってたくましく生きる子どもを育てる学校経営と 校長の在り方」 平成27年7月2日（木）3日（金） 福島県にて開催

〔成果〕

- 開会行事では、プレゼンテーション「福島は今、そして未来へ」により、他県校長に福島県の現状や取組を効果的に伝えられた。（多数の校長より感動したという声が聞かれた。）
- 記念講演・対談では、「ならぬことはならぬ『今に生きる会津藩教育』」の講演と「ありがとなしあいつ」の対談に分けたことで、講演の内容が対談に生き、会津の歴史や文化をたどりながら、先人の教えや教育のあるべき姿を考える好機となった。
- 閉会行事では、「大会宣言文」が読み上げられ、「東北はひとつ」という意識が高まった。
- 分科会発表では、多くの発表がその地区で取り組んできた組織的な研究内容であった。協議の柱立てを考える際に、近くの人同士で話し合う機会を設ける工夫があった。
- 分科会協議では、各分科会担当幹事が成果と課題をまとめ、質の高いまとめの内容となり、3時間の分科会の協議内容が明確になった。また、グループ協議を取り入れ、協議の柱を明確にしたことで、柱立てに沿って参会者が積極的に話し合えた。

〔課題〕

- 記念講演・対談では、コーディネーターが、ゲストのよさを引き出し、今日的教育課題などと結びつけた。今後、企画・運営面で現場の校長の代表を参加させる等、フロアを巻き込んだ対談、シンポジウムの在り方を検討したい。
- 分科会では、個人発表で終わる分科会も見られた。質の高い研究成果を共有する意味で、組織的な研究の在り方にも工夫をしていく必要性がある。また、グループ協議で2つの視点を話し合うためには、各視点一つの柱で十分であった。

〔運営上の工夫〕

- 全体運営では、大会に向けて会津の実行委員会と福島県事務局の校長が、数年前より連携し、きめ細かな準備にあたり、大会当日の全体運営も、大変スムーズに実施された。
- 全体会は、会津若松市「会津風雅堂」で開催、充実した全体会につながった。分科会会場をホテル等にしたことで、設営等一切をホテル等に任せられ、快適な環境のもと分科会が進められた。
- 分科会運営では、大会前より県内外の発表者と担当幹事との事前連絡が密にされ、研究課題や視点に沿った、充実した研究発表がなされた。また、PCをレンタルしたことで、設置や動作確認作業の負担がなくなった。
- 受付・案内・接待では、受付ホールにゆとりがあり、会員、来賓等の導線が明確であった。
- 宿泊については、温泉宿がほとんどで、各地区内で交流が図られた。また、朝食の時間を早めにしたことで、分科会までの時間に余裕ができた。

〔その他〕

- 開催期日については、夏季休業日開催の意見もあるが、東北の夏祭り、2学期開始時期等を考えると適切な時期である。

【関東甲信越地区】「未来を生き抜く知を磨き 絆を強め 学び続ける子どもを育てる学校経営」

平成27年6月11日(木) 12日(金) 新潟県にて開催

〔成果〕

- 分科会、分散会において、校長を主語にした提案に基づき、討議の柱が明確に示され、活発な意見交換がグループ協議の場を中心に行われた。各都県の実状、課題が出され有意義な会であった。
- 記念講演会はPTAからも参加を得た。開かれた校長会、信頼される校長会を目指す表れとなった。

〔課題〕

- 活発な意見交換が行われたグループ協議については、時間不足との指摘があった。時間配分については検討の余地がある。
- 新潟では会場選択の余地が少なく、全体会を行った朱鷺メッセ会場の制約もあり、全体会場の座席、音響等について課題が残った。

〔運営上の工夫〕

- 昨年の全連小埼玉大会を参考に大会要項等の事前配付を行った。事前に提案等を確認して参加することについては効果があった。
- 「おもてなし」「本丸は分散会」「校長を主語」をキーワードとし、大会運営に当たった。分散会会場をできるだけ集中することで参加者が混乱することなく参加できるよう心がけ、高い評価を得ることができた。

〔その他〕

- 大会要項等は、余裕をもって発送したつもりであったが、宅配便を使った関係上事前に届かなかった参加者もあり、課題となった。
- PCを使った提案発表が一般的となった。新潟市教育委員会のご厚意で各学校の機器を使用させていただき経費の削減につながった。

【東海・北陸地区】「新たな学校教育の創造と具現を目指して」

平成27年10月15日（木）16日（金） 静岡県にて開催

〔成果〕

- 大会主題について、全体会の挨拶や祝辞、記念講演から、参加者が「新たな知を拓く」ことの意味を共通理解することができた。記念講演” Be Creative!” から、参加者がこれまでの取組を新しい感覚で見直そうという意欲と情熱、視点を得られたと感じた。
- 分科会では、参加者全員が発言し、新たな情報も得ることができたと好評であった。

〔課題〕

- 第1日に分科会、第2日に全体会を実施、また、次年度の岐阜大会でも同様の日程で実施する予定。平成29年度愛知大会では、スリム化を念頭に置き、「第1日午後より全体会、第2日午前中に分科会」の案を検討。日程のスリム化と質を落とさない分科会を目指す。

〔運営上の工夫〕

- 分科会におけるグループ協議の充実を図るために、分科会責任者や座長（グループ司会・静岡県の校長）を対象に9月上旬に拡大研究委員会を実施。特に、「校長の役割と指導性」に焦点を絞った話し合いが行われるように、キーワード・キーセンテンスを提示し、協議を進めた。（参加者からは、全員が発言し新たな情報を得ることができたと好評。）

〔その他〕

- 大会・運営部会の合い言葉は、「おもてなしの心で」。参加者に、来てよかったと思ってもらえるよう準備した。一丸となり取り組んだことで、各校長が大きな自信を得た。

【近畿地区】「自ら進んで学び 未来に向かって 共にたくましく生きる子どもの育成」

平成27年8月4日（火） 滋賀県にて開催

〔成果〕

- びわ湖博物館館長 篠原徹氏による記念講演では、遊びを通してルールや譲り合い、相互扶助を学ぶという「遊びの精神」が必要であることなどについて、教育の原点というべき「自然の中での遊びの必要性」についてご教示いただいた。
- 分科会では、6分科会に分かれて研究協議を深め、互いの取組を検証し、山積する教育課題解決に向けての情報交換や意見交流し、今日的教育課題を共有し、今後の小学校教育の在り方について共に学び合う貴重な時間がもてた。

〔課題〕

- 分科会の時間を長く確保するために、来賓祝辞等開会式の内容と進行について検討し、分科会の時間をより多く設定することも次回大会から検討する。
- 提案レポートは、校長としてどのようにリーダーシップを発揮し学校経営に当たっているか、どのような方針を立て実行したのかが大切な視点、それらを核にしたレポートになるよう、それぞれの府県において内容の吟味をしていくことが必要である。

〔運営上の工夫〕

- 真夏日の開催の中、できるだけ屋外での移動を少なくするため、公共交通機関の最寄り駅から借り上げバスを運行、参加者を輸送、一つの施設内で開会式、全体会、記念講演、分科会を実施した。移動時間が少なくなり、分科会の時間を長く確保できた。
- 全体会場は、横に広い設定であったため、両サイドにスクリーンを設置し、どの座席からも視野が確保できるように配慮した。
- 分科会会場は、小グループでの協議を中心に考えて、最初から円卓をセッティングした。「話し合いがスムーズにできた。」「ゆったりと話し合えた。」「分科会会場のセッティングがすばらしかった。」など、おおむね好評であった。

〔その他〕

- 「近畿は一つ」という連帯理念に立ち、研究と実践を積み重ねてきた。府県によっては会員数が減少傾向にあるが、学校経営の責任者としての自らの使命を自覚し、明日への一歩を力強く踏み出す

ための一助としてきた研究大会が、今後も近畿小学校長会協議会会員が共に学び合う貴重な場として、継続発展させたい。

**【中国地区】「志を高くもち 未来へ向かって 共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進」平成27年10月22日（木）23日（金） 山口県にて開催
〔全連小全国大会〕**

〔成果〕

- 三重、埼玉大会の分科会領域と各分科会の成果と課題を引き継ぎ、山口大会での立ち位置を明確に示すことができ、多くの実践報告を基に活発に協議と情報交換が行われ、深まりのある研究協議が展開できた。
- 3名の山口県縁のシンポジストから、それぞれの立場と経験に基づいた含蓄あふれる分かり易いトークを拝聴でき、これからの学校教育への期待や果たすべき役割等について多くの示唆を得ることができた。

〔課題〕

- 全国大会のため、宿泊や交通に関するキャパシティー不足から、不自由さを感じさせた。
- 分科会場の確保が難しく、会場での協議する環境構成が十分ではなかった。
- 分科会での小グループ協議の成果をその場でフィードバックさせる工夫が必要であった。

〔運営上の工夫〕

- 県小学校長会とOB協力者との連携による会場周辺でのおもてなしを大切にしました。
- ホームページ上での大会要録や大会に関する情報の公開による事前研修の機会を拡大した。
- 三重・埼玉大会の分科会における成果と課題を集約した資料を提供した。
- 書画カメラを活用した分科会小グループ協議による報告とした。
- 大会コンセプトに沿ったシンポジウムを進行した。

〔その他〕

- 晴天に恵まれ、全体会場から分科会場への移動がスムーズに行えた。
- 大会終了直前に帰路に着こうと、いち早く離席する会員のマナーを問う声は多い。

【四国地区】「夢に向かってチャレンジし、豊かな未来社会を共に創造しようとする子どもの育成」平成27年6月26日（金） 香川県にて開催

〔成果〕

- 学校経営、教育課程、指導・育成、危機管理、教育課題の5分科会に分かれ、各2本の実践提案を踏まえた熱心な研究協議が実施できた。
- 記念講演「かがわ発 夢の糖「希少糖」」及び「中央情勢」に係る大橋会長講話により、これからの小学校経営及び校長の在り方について、各参加者が考える好機となった。

〔課題〕

- 参加者数は、規定で開催県全員と各県60名とした。会場施設の収容人員に余裕があった。
- 平成28年度以降は隔年開催となることから、研修の機会確保のため参加者数の増加が望ましいとの声がある。一方で各小学校の現状を考慮すると、研修のためとはいえ、多数の校長が県外出張することについて、是非が問われるとの声もある。
- 大会日程及び参加者数等については、再検討する必要がある。

〔運営上の工夫〕

- 分科会協議を活性化し全体として議論を深めるため、予め実践発表県以外に代表質問者2名を依頼。代表質問者へ事前に資料送付し、具体的な実践内容を踏まえ、学校経営改善の観点から質問してもらった。
- 数年続いてきたワークショップ型のグループ協議に比べ、議論の柱が明確となり、分科会が実践交流の場から課題解決に向けた議論の場となり、深まった議論が展開された。
- 分科会協議の運営方法については、今後も担当県で創意工夫していく必要がある。

[その他]

- 研修の機会充実のためには複数日開催もあるが、現在、各県からの要望はない。
- 各県とも学校数の減少に伴い会員数が減少、組織運営に係る予算が逼迫しつつある。経費節減の観点から、研究紀要や研究集録等の装丁、会場などについて、見直しが必要となる。

【九州地区】「豊かな社会力をみにつけた子どもを育て、魅力ある学校経営を推進する校長の理念と指導性」 平成27年8月6日（木）7日（金） 沖縄県にて開催

[成果]

- 全連小会長より次期学習指導要領の方向性等が報告、校長の意識改革とグランドデザインをもった学校経営への説明があり校長の指導性・リーダーシップへの意識が高まった。
- 校長の理念と指導性についての協議が深まった。
- 「九州はひとつ」の気運を高める大会となった。

[課題]

- 各県、統廃合校が進み会員が減少、逼迫する予算の有効活用による充実した大会の在り方の検討。
- 九州各県の情勢として2学期始業式が早まる傾向にある。学校の登校日と重なる可能性を含め8月開催日を考慮する。また、台風等気象状況も考慮する。

[運営上の工夫]

- 大会運営要項に、大会期間中の運営要項・大会組織・進行要領等の詳細がまとめられ大会全体のイメージを早めに掌握できるよう各県会長と事務局、県内会員全員に配付し周知を図った。
- 校長会の凝集性を高める為、全員に役割を与え取組んだ。（離島校の校長へは袋詰め等の業務分担）
- ロゴマークやキャッチコピー（伊バチョーデー 美ら島沖縄で 明日の教育を熱く語ろう）等で大会を盛り上げた。

[その他]

- 閉会式で全体合唱「島人の宝」を行い、アイデンティティを高めた。
- 県校長会全員で校長手作りのミニ太鼓（ユイマール太鼓）を作成し大会への気運を高めた。